

令和7年度 自己評価書及び学校関係者評価書

標記の通り、令和7年度の簾舞小学校における自己評価と学校関係者による評価がまとまりました。学校関係者の皆様から、子どもたちが主体的に取り組めるよう工夫された教育活動にしっかり取り組んでいるとご意見をいただきました。令和7年度も課題を踏まえ、全職員で心を一つにして努力してまいります。

- 1 学校教育目標「人間尊重を基底に自らの目標を設定し、他と共に向上していこうとする主体的な子どもを育成する」
- 2 本年度の重点「自他を大切にし、自ら動き出すたくましい子の育成」
～子どもの理解者となり、よさや可能性を伸ばすしなやかな教職員～

観点	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	実践報告と改善の方策	自己評価の適切さ	改善案の適切さ
1 徳「豊かな心」命を大切に する教育の充実	① 自己肯定感、他者信頼感、自律性(規範意識)、社会性(相手意識)の醸成	B	●友達や学年の <u>よいところや頑張りを発表する「いいね金メダル」</u> に継続して取り組み、よさを互いにたたえ合う機会を定期的に設定したと同時に、「よさや頑張りをを見つける力」を育むよう関わってきた。 ★挨拶(返事や感謝の言葉も含む)が不十分なこと、馴れ合いによる言葉遣いの荒さが課題。他者を理解しようとする心を育てる指導にこれまで以上に取り組んでいく。	A	A
	② 道徳教育、社会性を育む体験的な活動、言語環境の整備の推進	A	●「 <u>ASU 挨拶運動</u> 」を継続してきたことで、地域の方からも挨拶をする子が多いとお褒めの言葉もいただいている。★次年度以降もマンネリ化しないように取組を工夫していく。 ● <u>簾舞通行屋・あいあるみすまい等、地域の施設やお店に御協力いただく学習がコロナ前に戻せている。</u> ★次年度も地域と校種間連携を進め、実施していくと同時に、マナーの指導も継続する。	A	A
	③ 児童理解、教育相談の充実＝「命を大切に する教育」	A	●日常的に児童の様子を共有でき、全教職員が全校児童を見守る体制がとれている。また、相談支援パートナー、スクールカウンセラー等、外部の専門機関と連携しながら <u>きめ細やかな児童理解に努めた。</u> ★今後も児童の思いを素早く的確に受け止め、問題が起きる(大きくなる)前に、保護者との連携を密にしたり <u>教職員が情報を共有したりして、チームとして支援の方法を考えていく。</u>	A	A
2 知「学ぶ力」学ぶ力の育成 プランの推進	④ 挑戦する意欲を伸ばし、人と学び合う方法を身に付ける授業構築	B	● <u>全教員が授業を公開</u> し、互いに学び合うことで子どもの学びを深める手立てを探り、よりよい授業構築を目指してきた。今年度も1時間の授業で学びを確認し、定着させるために学習の「 <u>振り返り</u> 」に焦点を当てた。具体的な視点をもたせることで、その効果や意義はあったと考えられる。 ★「問題意識」が生まれる学習展開を工夫できたが、学びが深まるような教師からの「問い直し」の方法をさらに検討し、改善していく必要がある。 ★学び合う上で必要な「 <u>聞く力</u> 」を伸ばすために一貫した指導を行う。	A	A
	⑤ 子ども一人一人の資質・能力を高め、子どものよさや可能性を最大限に引き出すことを目的とする「課題探究的な学習」(AARサイクル)	A	●「TT」「少人数指導」を行い、児童の実態に沿ったよりきめ細やかな指導を行ってきた。 ★ <u>すべての子どもたちを全教員で育てる「先生がいっぱい(複数の教員による算数や教科の指導)」の時間を効果的に活用</u> し、さらに基礎基本の定着を目指す。 ★受け身ではなく、子どもが自ら学びに関わる基盤をつくるため、宿題や家庭学習の取組を改善していく。	A	A
	⑥ 自分への自信につなげるきめ細かい指導の充実(基礎に降りていく学び)	B	●1年生から継続的に一貫した指導を積み重ねているため、学習規律は定着している子が多い。 ★⑤同様、 <u>基礎的な学力の定着と家庭での学習の習慣化</u> のため、宿題や家庭学習の取組を改善する。 <u>保護者とも連携して学びを進めていく。</u>	A	A
	⑦ ICTを活用した教育の推進(一人一台端末のより効果的な活用)	B	●一人一台端末が支給されて4年、 <u>授業の様々な場面で活用し、児童の表現力や理解力向上に効果を上げている。</u> ●朝の活動では、 <u>週に一度タブレットPCの時間</u> が設けられ、タイピングの練習や各教科のドリルを進めてきた。 ★タブレット使用の際のルールを学校として統一する必要がある。 ★デジタルとアナログの効果的な使い分けを考えていく。	A	A

3 体「健やかな身体」の育成	⑧ 体や心を動かす、鍛える、丈夫にする	A	●跳び箱やマットなどを体育館に常設する「 <u>マットび週間</u> 」を10月に設定した。体育の時間だけでなく休み時間にも運動に浸る機会を増やすことができた。	A	A
	⑨ 体を使った遊びの奨励による運動の日常化（三間の工夫）	A	●各学級でも外遊びを呼びかけ、できるだけ体を動かして遊ぶ機会を確保した。 ★冬の外遊びを行う児童が少ないことが課題。スキー学習後はソリや雪山遊びを開放していく。	A	A
	⑫ 食育の充実	A	●藤野小学校の栄養教諭と連携を取りながら、実施することができた。どの学年の児童も食に対する関心を高め、 <u>健康や栄養について考えることができた。</u> ★友達と話しながら食べられるようになったので、食事のマナーに加え、より「楽しく食べる」「感謝して食べる」ことができるようにしていく。	A	A
	⑬ 創意工夫を生かした特色ある教育課程の編成	A	●総合的な学習の時間が子どもの創意工夫を生かして「 <u>簾舞・豊滝地区のよさ</u> 」を学ぶ内容となっており、地域の特色を生かしたカリキュラムが構成されている。学習発表会などで子どもたちが主体的にその学習を発表する機会を設けた。 ●簾舞小の先生方が中学校を訪問し、授業参観や教員同士の交流会など、 <u>簾舞中学校との交流を継続できた。(次年度は小学校の授業を参観予定)</u>	A	A
	⑭ 適切な役割分担と相互の連携など協働体制の充実	B	● <u>よりよい指導のための情報共有が日常的</u> になされている。内容は授業・児童理解など、多岐に渡っている。 ★「働き方改革」について、 <u>効率よく業務を進めることができるよう</u> 、学校評価で得られたアイデアを基に、様々な業務の改善を進めていく。 ★「全教職員で全児童を見守る」「子ども一人一人に合わせた適切な関わり」が大前提であることは変わらない。	A	A
4 「教育環境の整備」（全職員によるカリキュラムマネジメントの実現）	⑮ 保護者・地域への積極的な発信と信頼関係の構築	A	● <u>学校ホームページは、学校生活の様子を知らせ、皆様に毎日よく見ていただいている。</u> ★今後も、全職員で更新を続け、子どもたちの様子を発信していく。 ●昨年度から導入した学校・保護者間連絡システム「すぐーる」も、保護者や地域への連絡に活用できている。	A	A
	⑯ 子どもと触れ合う時間の確保	A	●朝、登校する子どもを玄関や教室で迎えたり、休み時間一緒に遊んだりすることで、 <u>児童との会話やふれあいを大切に</u> してきた。 ★今後も全職員で、子どもの看取りや触れ合う時間を大切に、子どもにとってよき理解者である教職員として子どもとの関われる環境を作っていく。 ★校務支援システムの有効活用により、児童との時間を確保する。	A	A
	⑰ 子どもの心身を守る安心・安全の確保	A	●ヒグマ講座、集団下校訓練での「子ども110番の家」の確認など、緊急時に備えた取組を継続している。町内会の「防犯用熊鈴」の貸出や街頭見守りのおかげで、安全の確保ができています。 ●教職員がトランシーバーを使用することで、教職員間の迅速な連絡と適切な対応につながっている。 ★「 <u>安心・安全だより</u> 」を発行し、 <u>連絡を徹底したり、ホームページでもお知らせしたりした。</u> 今後も地域の皆様の御協力を得ながら、安全確保の徹底を図る。	A	A
	⑱ 日々改善充実を図る授業	B	●教職員の研修をだけでなく教員間で学習や指導方法について日常的に話したり、相談したりできている。 ★次年度も授業力向上のため、対話を大切にしながら研修の機会を充実させていく。	A	A

	⑱ 小中9年間で全員で積み上げる指導、9年間で『理想の子ども』を仕上げる	B	●入学当初の1年生のお世話をする中で、1年生が学校に慣れるだけでなく、6年生にとっても最高学年としての自覚や責任感など、成長につながった。★これを継続することで、下学年が上学年への「あこがれ」をもつことが本校のよき伝統になると考える。 ★今後も、コミュニティスクールの導入も見据え、小中一貫した教育を推進するために、学年間・小中学校間のつながり(引継ぎ)を絶えず意識した学校運営を目指していく。	A	A
5 「 教 職 員 の 資 質 ・ 能 力 の 向 上 」	⑳ 子ども理解の深化を図る研修の充実＝多様性を認める、ローモデルとしての教職員	A	●いじめアンケートや振り返りカードを基に、担任が子どもと個人面談を実施し、 <u>子どもの困り感を素早く把握し、即時対応を心掛け、全体で共有した。</u> ●「 <u>学びの支援全体会</u> 」「 <u>いじめ対策会議</u> 」を定期的開催し、「全職員が全児童の担任」という意識をもって、子ども理解に努めた。 ★ローモデル(子どもにとって身近なお手本)としての教職員として、子どもに寄り添うことを意識して取り組んでいく。	A	A
	㉑ 教職員が自ら学びをデザインする(対面、オンライン、動画等)	A	●効果的な学習にするために、個人と集団、デジタルとアナログなど、多様な学習の形態を工夫できている。 ★今後も情報を交流しながら研修を重ねていく。	A	A
	㉒ 子ども理解の深化を図る研修の充実＝多様性を認める、ローモデルとしての教職員	A	●いじめアンケートや振り返りカードを基に、担任が子どもと個人面談を実施し、 <u>子どもの困り感を素早く把握し、即時対応を心掛け、全体で共有した。</u> ●「 <u>学びの支援全体会</u> 」「 <u>いじめ対策会議</u> 」を定期的開催し、「全職員が全児童の担任」という意識をもって、子ども理解に努めた。 ★ローモデル(子どもにとって身近なお手本)としての教職員として、子どもに寄り添うことを意識して取り組んでいく。	A	A

<学校関係者評価委員の皆様からいただいた御意見>

- ・小中と地域で連携して、挨拶運動などできればよい。
- ・家庭学習の習慣化については、小中共通の課題なので、知恵を出し合って家庭と協力できるとよい。
- ・「セルフDAY」はとても良い。保護者も学習に関わることで理解度を確認することができる。
- ・「すぐーる」をもっと活用してもよい。宿題の解答の配布等、できるとよい。
- ・コミュニケーション不足が目立つ最近の社会の中で簾舞小の先生たちはコミュニケーションが取れていてよい。コミュニケーションの大切さを令和を生きる子どもたちに教えてほしい。
- ・「いじめ」の重大さを教える必要がある。
- ・いじめ対応は、小中で情報を共有して対応していきたい。
- ・運動能力の低下が課題となる中、これからも体を動かす楽しさを教えてもらいたい。